

ハーバードの学生支援システム・その二 米国に学ぶわが国のあるべき学生支援

伊藤 孝行

(名古屋工業大学大学院情報工学専攻助教)

粥川 裕平

(名古屋工業大学大学院産業戦略工学専攻教授
保健センター長)

一 はじめに

前回(平成一八年三月号)、ハーバード大学の学生のメンタルヘルスケアを中心に紹介した。今回は、同じボストン地域にあるマサチューセッツ工科大学(以下MIT)の学生に対するメンタルヘルスケアを中心に紹介する。そして、ハーバード大学やMITに共通する学生のメンタルヘルスケアの質の高い環境を分析し、我が国の大学の学生支援のあるべき形について議論する。

MITは、アメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストン(正確にはケンブリッジ市)にある私立大学である。一八六一年に自然科学者 William Barton Rogers によって草案がマサチューセッツ州に提出され、一八六五年から、ボス

トンのダウンタウンに教室を借りて授業を開始している。MITは「pragmatic and practice」を基本精神としているように、実際に働いているエンジニアを対象にした学校であった(下記メンタルヘルスケア部長シーゲル博士の話によると専門学校に近かったそうである)。

その後科学や工学の発展に伴い、世界的な工科大学になり、工科系の大学としては世界ランキング一位の座についている。大学の総合的な世界ランキングはいろいろあるが、およそ一〇位以内には入っている。MITの六一名の関係者がノーベル賞を受賞しており、高度な科学教育・研究が行われている。一時は資金難からハーバード大学との統合の提案もあったが、MITの卒業生の反対で、統合は見送られたそうである。MITの気質としては、権威に対して必ずしも迎合しないという風潮が強い。近年は、すべての

授業をWebで公開するという試みが行われている。

MITの興味深い文化として、ハック(Hack)というグループがある。ハックという言葉は、コンピュータの用語として現在使われるが、MITがその源であることはよく知られている。例えば、MITの有名なグレートドームを映画スターウォーズのキャラクターR2・D2に塗り替えてしまったり、パトカーを載せてしまったり、MIT敷地内に大砲を置いたり、学長室の入り口を隠したりなど、地元の新聞の一面を飾るほどのイベントを実施している。いわゆる大規模なイタズラであるが、あくまでもジョークであり、イタズラした後の現状復帰の方法などの手順がかかれたメモは必ず提供されるそうである。

二 MITのメンタルヘルスケア

今回MITのメンタルヘルスケアに関して、MITのメンタルヘルスサービス部長 シーゲル博士(Dr. Alan E. Siegel, MIT, Chief, Mental Health Service) にインタビューをさせて頂いた。

まず、MITのメンタルヘルスケア部門は、MITメディカル(MIT Medical 医学部ではない)の一部門である。MITメディカルは一言で言うと病院であり、四階建ての建物に入っている。MITメディカルの特長は、MITの

敷地の中にある点である。敷地の中にあるのはハーバード大学やイェール大学と同じ思想に基づいている。ただし、それが標準ではない。アメリカの大学は、大学によって、ヘルスケアに対する考え方が全く違うのである。逆に標準的な考え方というのではない。例えれば、B大学はとても質の高い大学で学生数も多いが、ヘルスケアに関するスタッフは四五人で、実質的に大学の外にヘルスケアを任せているようである。

MITやハーバード大学のあるボストンには、極めて有名なかつ質の高い病院が数多くある。それにもかかわらず、学内の敷地の中に病院を置くのは、「コミュニティ」の中に病院を置くという思想からきているそうである。研究者や学生がいつも生活している場所に病院があることは、健康管理という観点からも非常に重要とのことである。この発想は、突然生まれたわけではなく、長い歴史の中で培われたものである。また、これは、日本の大企業も同じような仕組みを持つ企業が多い。その意味では、日本の大学も、コミュニティの中に健康管理をする組織を置くという点を重視すべきかもしれない。

MITメディカルの予算は、学生の授業料の中のhealth feeが主な収入源である。その他にも多くの基金等がある。そのため、学生は無料で診療を受けられる。学生のメンタルヘルスケアに関しては、MITメディカルの他にもSP-

dent support service」というグループもある。前回紹介したハーバード大学のBSCのような組織のようであるが、BSCほど整理されたグループでもないという印象を受ける。MITメディカルのメンタルヘルス部門では、アポイントメントを取る場合もあれば、飛び込み及び緊急の診療・相談も受け付けているそうである。設備も非常に清潔感があふれており、非常に利用率は高く、実際待合室には多数の学生がいた。

最近、メンタルヘルス部門では、MITの教員に対するメンタルヘルスに関するトレーニングを行っている。教員に対して、メンタルヘルスケアシステムという概念自体のトレーニングから、そのような観点からの、学生への接し方、メンタルな問題を持っている学生の発見の仕方などを指導している。さらに、最近、アメリカ空軍で、大きな成果をあげた、「メンタルヘルスケアのすべての概念・仕組みを、すべての人々に教える」という方法を導入する予定とのことである。ここでは、「すべての人々に教える」というのがポイントで、メンタルヘルスケアの具体的な中身までの知識をすべての教員・学生に持たせることよって、メンタルヘルスに対する重要性をコミュニケーション全体に認識させる。日本では、メンタルヘルスの簡単な概要程度を知っている程度で、実際に正しく知識をつけ活用しようという試みはまだ発展段階のように感じる。

MITメディカル全体でも同じことが言えるのだが、特にメンタルヘルス部門で最も気をつけていることは、「Easy access」だそうである。すなわち、いつでも、誰でも、気軽に簡単にアクセスできるという点である。病院組織が大学の敷地内にあるという点が、「Easy access」を実現する重要な点であろう。

三 MITのメンタルヘルス一問一答

シーゲル博士にメンタルヘルス部門に関して、共著者の粥川博士と相談の上、いくつかの質問をした。正確なデータは残してはいないが経験的な値としてお答えを頂いた。

問一 うつ病、統合失調症、アルコール依存、薬物依存、自殺などの精神疾患の発生率は年間各々何%くらいか？

答一 うつ病、統合失調症、アルコール依存、薬物依存は極めて少ない（いても10〜15人/年）。自殺は、アメリカの平均（約1・3名/1000名）より少ない。

問二 ハラスメント（セクシャル、アカデミック）による被害学生の相談は、年間何名くらいか？

答二 おそらく年間50名前後。

問三 ストーカーなどの被害にあう学生の相談は何件くらいあるのか。その際の対応は、ストーカー防止法以外に、大学独自で決めたものはあるか？

答三 5〜10名/年程度。ストーカー防止に関しては、MITの学生全員に配布されるStudent Handbookに記載がある。

問四 自殺が発生した場合に、遺族や同級生のケア（ポストヴェンション）は行っているか？

答四 行っている。スタッフ、研究室、クラスの学生からなるグループが遺族などのケアをする。

問五 学生時代のメンタルヘルスと、卒業後の適応についてフォローアップは行っているか？

答五 特には行っていない。しかし、卒業生について、我々は「Good bye」とは言わない。いつでも戻ってきて、問題があれば、相談にのるようなことはする。

問六 うつ病、双極性障害、統合失調症などでは、留年や休学も余儀なくされるが復学に際しての支援システムはあるのか？

答六 学年などはもとに戻り、授業料は基に戻される。スタッフや学生からなる特別グループによるケアが行われる。

問七 退学に精神疾患はどれくらいの率で関連しているのか？

答七 90%が関連している。

問八 ドミトリーについてはどうか？ ドミトリーが学生のメンタルヘルスケアに役立っているのではないか？

答八 4500名の学部生がほとんどドミトリーに住んでいる。また、大学院生の30%がドミトリーに住んでいる。ドミトリーには専任のスタッフがいて、学生の生活の面倒を見る。このような住環境は、学部生が普通のアパートに住んで、隔離される生活をするより、格段によいだろう。

問九 MITやハーバードのメンタルヘルスケアは特別か？

私の率直な疑問を、シーゲル博士に聞いてみた。「MITやハーバードやイェール大学のメンタルヘルスケアは世界で特別なのか？」

シーゲル博士は、しばらく考えた後、次のように答えた。「特別だと思う。理由はわからない。ただ、長い歴史と環境がそうさせたのだと思う。特にMITは、どちらかというと貧困なエンジニアなどを対象に勉学を教えるための施設として設立された。しかし、世の中のサイエンスやエンジニアリングに対する重要性から、このような目覚ましい発展を遂げられたのだと思う。今のMITには、Intellectually funded（知性に関して恩恵・資金を携わった）学生が集っている。そのため、それをサポートする我々のような組織も特別に発展しているのは確かである」

この回答には説得力がある。MIT、ハーバード、及び

イエール大学というのは、自らが特別だという意識が強い。特別だから、当然学生のメンタルヘルスケアにも十分に気を遣う。しかし、MITも最初から特別であったわけではない。むしろ、特別なよい循環を長い歴史の中で培ってきたのである。

よい循環とは、「よい学生を集める→よい知的フアンド(恩恵・支援)をもらった学生が集る→学生支援の環境が整う→よい学生が活躍できる→大学の知名度があがる、大学の影響力が大きくなる→よい教員が集る→よい授業ができる→よい学生が集る」という循環である。

また、シーゲル博士とのインタビュでよくでてきた言葉として「コミュニティ」がある。大学を人々の集まるコミュニティとしてとらえ、そのコミュニティ全体としての質の向上、及び、改善を歴史的に進めているのである。

よい学生を集める、よい授業をする、学生の支援をしっかりとやる、というのは、大学というコミュニティ全体をよい循環にのせるために絶対不可欠である。実際、触れてみると、ハーバード大学やMITは上の循環の要素のどこも欠けていない。それは、スタッフが多いからとか予算が多いから、ではなく、コミュニティ全体としての循環が良いのであって、「スタッフが多いから、予算が多いからできるんだ」のような議論は、卵が先か鶏が先かの議論のように思える。むしろ、その場合、卵も鶏も質を向上させなけ

ればならない。すなわち、どの部分の支援も改善していかなければいけないのではないかと思われる。

五 おわりに

今回はMITメディアカルの、メンタルヘルス部門長シーゲル博士へのインタビュによって、MITの学生メンタルヘルス体制を概観した。

そして、MITやハーバードの学生メンタルヘルスが非常に高いレベルにあるのは、自ら「特別だ」と自覚する構成員によつて、実際に高いレベル循環が保たれているという点である。卵が先か鶏が先かという議論よりも、卵も鶏もきちんとサポートし、その循環を改善する必要がある。

大学全入時代に突入したわが国では、優秀な学生が集まる魅力ある大学にするともに、MITのようなメンタルヘルスケアを持っているか否かが、サバイバルの試金石の一つになることは間違いない。